士朗七部集　五

911.3
シ
5

木所津し

西行堂記事并

尾張国玉ノ井よりきの駅を去事一里
あまり南春日井原郡すへて小川あり
西行渡と呼へるハ川の名にや西上人
杖をとゝめ給ひて尾張かれの菴を
結ひみ川りつゝ肖像を彫刻し給ふ
よしあしの歌の詠歌なりしか今も古俗の
口に傳ふ其後此所に西行堂は形も
川流に流れけるもまさへ洪水のさ
象を流失して其数百年の浮去の川下

あるは白村といふところにて芦荻なる淀川
よりの翁が肖像を模したりしを猶ありて
府下の史學者某ぬしを借りたまへり
それより隠士白樵庵ふるふにもち紙
弟気なる生に繪くこと寶暦の頃より埼菊の
今雪庵にはしめて翁といふを小牧なる臥雲英
布毛和尚なりと請求ありしもののおゆゑ一字
を遺之の志ありてしるす彼堂に祀りはすられて
菜園となり一天地の營しをなむつくりしとて
其の時はしめ昔のところ一の名園となりし家
くら建て園地をトしてあらはに安置しあり

ころをわたる連雲寺井門は往古より
也ぬともあるものの堂宇も何しへきの
すちうく瑞穂なる社中にあり諸
それより翁ひとしる繪肖像をものにし
よそに僕が家のうちにはるる茅舍を
結ひ構へをうつし碑を堀ゐ建てて永く
その人の光をとどめるおもむきとなりぬ
天然八のよし年東のまつり得法
しるす

西行堂の新に
築なるをよろこびて

木瓜つゝじ堂は造りのいかめしき萬が　士朗
鳥の巣守のねはゝ静なりし　得之
五月の衣にかくる東の風　大阜
宮の行燈のあつくさびたり　五雄
けふより瀬の流れと人の手をひは　岳輅
橘野広芝にむしろ置たる　秋挙
笹行の窓の住るに夜の来て　柏亭
骨柴とる集を書継く　九咲

山鳥称めの深き錦身やらは　有
哀の九折戸の船を押出す　可玄
流はしらとするとの八ゝ萩かれ　士精
ぬれ色の律とたりになし　青虎
それき尼子に家当のぬ子やあき　杜月
滝のひきまうく窓蓋　淇石
世の中の恵にかる花の隠れなる　鹿野
裏の雀のあそしむ　竹し　茎　滔龍
物狂ひの涙の袖を肩にかけ　芝
四条の辻かと一雅に　行　朗
まつくと雅のかゝる馬の糞　雄

批七級三下四十七

家の甍の花さむ雛しかり　阜
思ひくさも姑さ神の牙の梅や　挙
瘤の瘿鶺の泣りく黒髪きき　拾
鶯妹のふり薬にさはるやし　咲
構に株くさふ雅ふ　構　亭
可きまふ茂角にある　蟷螂　玄
谷越えか出る古宮の　棗　有
昼に月一人家炬に余りて　虎
降る夜と落る柿の寂しき　精
虫ともの出さん家あり　糠俵　石
沙腰き漆腰の　鐘　月

松風の崖に螢をふらさせて　竜
ちろむしく耳を擽らし　野
たゝら踏む一日〳〵の峯の雲　朗
水際のひろう柳引てゝ浅く　芝
人の家は先うつりし旅の窓　総
六日余の傍のかけ誘ふ　亭

士朗　三　大阜　二
得芝　三　岳輅　三
五雄　二
秋挙　二　梅亭　四

几咲　二　里有　五
可玄　二　士精　二
青虎　三　杜月　二
淇石　二　應野　二
潛竜　二

いなつま這迄道ても死ずくさの秋　士朗

旅の小せく川　蕎䔥の宿　得芝

月の出る一ふ處砂まうち明けて　柏亭

かつらの長き髪を追ひつる　朗

杉風のとりもあわさじ絶えぬ　芝

發菫をつまむきはらまひ来　亭

桶と耳の壬生を見さしと洞へ　朗

いつり成れる身とも此家へ来ぬ　芝

よもすからなまその見ふ小笠水　亭

古人いくつの世や隔つらん　朗
筆の[illegible]さえかくるさまに筆[illegible]　芝
半日松ふ　筆捨の峯　亭
夕陽に二百の端を[illegible]しられ　朗
筆に[illegible]し折　唐[illegible]の亮　芝
[illegible]について出月て[illegible]鳥　亭
常もむすぶ[illegible]さ[illegible]の若　朗
花の[illegible]時ハ[illegible]　芝
ひしぎ[illegible]たる[illegible]柳のかけ　亭
虎杖ハ[illegible]　噛むよのなかれ　朗
茶碗を洗ふ　水の[illegible]しき　芝

見る[illegible]に[illegible]くや[illegible]　離[illegible]山　亭
[illegible]と[illegible]なし[illegible]　咲　朗
戯女の[illegible]に[illegible]　嫁さ　芝
[illegible]のつ[illegible]るの　鉄釜　亭
[illegible]に[illegible]脛を[illegible]　嵐　朗
柿[illegible]する　妓王[illegible]の庭　芝
踊[illegible]にか[illegible]き　亭
みのむし[illegible]氣[illegible]る　朗
世の中のさ[illegible]を井戸田の[illegible]　芝
竹の[illegible]ハ[illegible]あり[illegible]　亭
蝶の[illegible]懐に入[illegible]平　朗

豆腐家ありといふハ嬉しく　螢

羅作る小ぬめと続きてつふきて　亭

咲くいろ菊ヶ原乃菫哉　〻

菜花ま鳴けむらさき波し　朗

枇杷の葉ふむしろ籠の名葉　芝

さくら咲く花を待日ハ来たりけり　イセ 椿堂

朝霧の丘へ降りし雲の蒼さかな　大ツ 千影

大空や松をはらふ風しきす　近江 竜山

雪はれくみえてつまる小かな　梅間

山寺やいろき花もあふこん　卓池

大よくみ花さる国の菜の月　岳輅

咲の花を障子 大堰川　黄山

一桶も結すき水ハあまりけり　十六 米彦

に朝ますてもみる兵 芒ハ月の家　竹有

朝毎にまたるゝ声も絶の杜宇　竹趣
宜郭や遠ざかさかる宮の月　野喬
ちまきは笹ふりしも夢の是　十六 万和
出替をとりまかくるり巾や卯　秋挙
淀鳥羽の出ハ蝶の嵐かな　珉屋
ますゞ咲ぬうちから蝶や山桜　イセ 翠川
菜の花やところ〻出ありく庵の外　十二六 長秋
松ハ雲に離れての間の桜かな　松菊
竹はしらよくもすまする宮の月　松菴
いさよひやうけなかりたる山の上　三九八 梅堂
出る月を抱つゝ見つし山の上　可竹

春の夜ハ素湯に耳元の絶すかり　三ラ 千阿
その事に甘いすゞひとへ桜かな　李臺
高蔵やすこし遠かれく春の月　其白
かくとしの音かく啼り南の関古鳥　五道
深山木に柿も実りてかん〻鳥　卓允
家をついでも我ハわきまえも秋の露　京 茂良
いさよひの月に寄とりも庵かり　鹿野
嵐のきく出かける古寺の夕立　大阜
蝶揚々やぶつくひすと拾ひかり　圃暁
鉢巾木ぬよもわ者ハ絹来かり　モモ 推巴
松見てはらも出かけて秋の門　八 氷阜

昼も夜も日も河りて猛そ花の上　　来紀

花々のよしの手出る気合かな　　野秀

小鳥ともさくらの中ハ淋しかり　　城呂

花の忠や山ハ瀧窟の思ひもの　　田寛

花々ハ花の出茅とおもへとりとも　　葛秋

人よみとふ所の花の末とけ哉　　拍亭

栽草辞　　朱樹叟

桃杞園にあそし川のうへ其の所り
秋綾森ぬ猫称はうさい出る梅の
さとに成家の出ししれは家の驚き
六ツの七川のうなひ子の大川
加らまる出子をうなる桃家にも気
むすりさハうすむらさきのけをかか
さ海なるの中まゝしとあ海やなし
うつ多しゆと嬉しける縁気なれ
その山路本のく伊やう過うし。の

出る家　伊勢の山の家名も年をふる
膝に孫も忍び出るまことわりなし
うまれ子の花を出したるの行も
おもむきやうれしさまさる　潤そ
去年まで

落ちて見る為鳥の声　近江　砂文
神子や寄りぬ登る伊勢山　イセ　省哉
打よふ雛もえし下八川田　国水
素顔の日まして高き桜かな　扑當
まるる舟のそろしとわたりけり　駅六

加茂川へ流るゝ出て入る雨の花　吐山
行春の戸はたて角力取　竹外
瀬をとう出しかりなりすまし　宇洋
秋風や寺ゝへ見えぬ山のれん　大蕪
素風や桜の花まして瀬田泊　餘祥
名桜の花のうつりかり雛の髪　月巣
節の盃とまだ八雛のはつ白　芳水
住よしハすこしよ出して　作亭
かくきに佛もまだ日ふり　梅淵
なかとめぬ見えぬ花　琴州
出の山は霧さる秋晴の鈴ぞ　几咲

猫の妻まちかねて出る垣根かな　鶯亭
そのゝ猫にハ忘れて通りけり　梵雀
岩よりハ藪鶯の山かれ　和楽
名も高き見ゆる宮ある清水かな　暁浦
梵天の花咲きもひろく山桜　秋国
きのふけふ観音さいの木も桜かな　湖凮
花蓮り蝶ものいはぬえらさかな　浦旦
なよなよく翻る蝶の心かな　杜農
父母の膝元によるゝ泣ふの月　蕉雨
月見るや母の手ひきに桃を拾ひけり　田江
三日月を何処やらにも見る芭蕉　如毎

名月や髪もなくしぬ花枝芒　平如
さかつたる月や〻花萩の花　周瑞
菴を出れハ神の光見る芒かな　素檗
夕立の跡しらを山家の灯りかな　啓甫
夕かほのやどの夕飯をくれてやり　草人
西よりる所りまうハ松風秋の風　李東
ふるさとや露のぬきたる秋の風　九岳
鴨の嘴水に髪さす枝かな　金陵
神楽や雀とまる門の口　五雄
所を礼そ梅折捨る山の奥　素剛
梅の香にもねふ出羽の月秋かな　朱月

枯尾花ひよく〳〵と角にぬけにけり　イセ 雀鳴
枯芦を藁に焚雲の日くれかな　槿雀
墨の子の落葉こゝも啼る蛙かな　硯静
行春や瀬よ人まちかねつも　青兎
山茶花や水の霜もつるし　求已
山畑やひよりたる鶉ひな　午風
小夜更て鶯の子も泣丁の声　可玄
鶺鴒のはしゝに隠るほとゝぎす　月底
若竹を見る年て啼鶯かな　畄 捨葉
海苑清く隠れよ入やまの暮　常梅
朝くや雛の辞往きし雀の子　沙鴎

春ひくや餅て足跡く雛の句　宇梅
門ぬく〳〵蓮を摘ぐり　大商
料やまきま秋の門口や麻畑　大ツ 五来
清水ねる子ら早苗の娘かな　里有
空鮭に味のはみるこ蝕に立かれ　三ヶ人 佳雄
崎ふけすゝのかもあらすさゝす　三ヶ 柳荘
雛よ鳴やちの鳴をきよの声　杜月
朝くよせ菊そる野もうけるかな　梅葉
涼風よ出るへ京良の佛たつ　橘光
枯の中く花ちらすなる棲かな　萱井
名月やりや袖にちかひ芳のなき　潛竜

水鳥の姿ふすまし鳰の海　帋更
咲く〳〵花の数より日の入さられ　雪封
おのゝしき咲色や修山家　淇石
大佛の屋根に年とる雀かな　士精
桜井孫里まで
旅人は譲られし去りぬ花のかけ　得芝
神宮でゆりかるともる山桜し　希言
初とつ花の色八沸しきとも　桂五

跋

老人宇箕既亡得於像本光精舍令嗣子得芝造堂于園中引水植樹以為流憩之所先生携諸子遊於堂聊娯一日之案閑作彼詠次綴歎行一韻吾徒欲梓行以揚之人之殘燼而示于世上因曰未亦躑躅集冀萬方之騷士争有掇拾之賜則可以報

造堂之華二季り

姉桃

士精

き孫うしく

五月雨ニ南天の花のちるみぎり　士朗

屋根遣ふ苔の色みえぬ柿かな　竹有

庵の露ふ家の人の見ゆりて　沙鴎

月の光のさやしくとする　鹿野

萩の稍る南ニ波をひろへたり　可竹

椿よつくるく戸のあらぬ　秋　月底

時雨るり烟ニ孫をうけて立　普天

牛も坪る老くり雪ふる　渭丘

うく白のうるさくゑとも黄やらん　有

大手ひろけの忍読の橋　朗
名月にはしても出あるこの杯　梅葉
暮に暮見る霧の世の中　松双
樫の実のちるも淋しき庵　野
路らしうりてかくうすをふむ　跨
炮烙を買てくそへたる船のとも　底
雛の声よりしらむと松　竹
花さやき年てゆふふとやしく　朗
三更姑なかる部屋に入り　天
かしましく法師をとめる女の子　丘
西海香子の萬文の香の沼色　有

おむろふ山はくやとと夢なくそ　松後
幸洲の宮の石積に去り　葉
手殺をえらふとする川の中　鴻
那分從の不位譽ぅ帰　野
七夕の月そのたえる桐一葉　竹
あそらしく涼きくす去り　平叔
上代のむとるも鄙にわるしあ　天
宗祇の小袖たくすそももしぬ　丘
華との香のこつまりかくる坂座のお　杜農
田うるにつまて苗のるかさした　朗
不二みそ見ぬ日も一日か二日ある　葉

鯛よしと君風呂より呼　後
烟の追しに來る蚊の畔　双
やすの墻ハ奇麗なりけり　底
咲花のむかしを忘む春の風　孜
春りけふの尻目する草　農

更衣二夜出て見る草笋　豊洲 与玉
まくらひとつ浮世をへだつ夜りかな　桂五
若草のせくむる月夜かな　松双
名月にまつ來る草のあらしかな　可竹

釣り毎にいつの節句の草の上　滑丘
松風の一夏涼しき尾の上哉　杜農
竹の子のふしおひぬく來る哉　梅巣
やくそくの猫迎しけり瓜の花　松後
雨の花の縄とく垣の雨具哉　平孜
都とうなは今朝の雲と八おもしかれとも　槎雀
橋のさくやくやうにのさとりけり　徐英
菊の峰うゑに郭公の影菖蒲　鼓几
人の來る日大とも庵の涼みかな　呂川
さゝ舟にすゝみの人の帰りける　大巣
杜宇おちつき里の古寺かな　硯静

我影の家中も何より夜の月　鷺我

月の露秋ハ芽てしまの粧かな　英雀

涼しさや月よぬれたる仏の肩　柏亭

行は須人うしろ御年ききん　橘老

始まる梵筋も山家ハあかまえ　而后

梅落ほ笑みも峯のさくり分　沙鴎

花けしや西の山里よ五番の盲　草人

松風も一息しきり蝶の夢　卓尭

名月や百合一輪の富士　珉屋

短夜よふけハ出来さり蛙の内　菊兮

唯易き恋しふ多の月夜かな　求己

郭公きくかりての八日物かな　五雄

夕栖まつやさつきの長雨や松　餘祥

薮ひとつ客こそ遠く水鶏かな　友鳳

麦芒卯ける鷺の背や夜ん　松菊

夕良のとかりの庵ハ月の影　竹堂

落りけり梳栗二年柿八年　金谷

雨垂してはや夕立のけしき哉　大商

さミたれや菖も桜も雨のその　駕凧

月残月の出かふまでの夜くかな　吐山

涼風をとうる人もなき山の松　士精

山竹よ草雛ぬくきハ蝶の夢　得芝

そろ〳〵と京の明け寺ちよ郭公　可玄
湖の水はたへ〳〵ふや川の月　曽洛
雲と見へ〳〵せけハ高き竜の路哉　大蕪
涼しさや夜むらしと魚の跡　五道
夕立にせりくも高き夜庭哉　ミカハ 岱呂
牛の子に月飲ます日の相け哉　棋老
滝の音残るを聞くもり宗古香　木常
花ひらに手を涼しゝる牡丹哉　芳 梅香都
鳴や水鶏田の中より牛か出る　呑鳥
梅嗤く牙ふるへハ鳴や水鶏　月巣
鳴出り月の水鶏の家流　亜碩

日の出る不二のけしきを郭公　雄途
ほとゝきす猿をうしろに船の後　如水
鳩の巣を縫ちを笠をおまうかり　芳 介亭
笠ぬくや宇鞋をとくる杜宇　萬象
あら田や牛のうけ出す膳所の町　士望
涼風や舟かろわたる瀬田の町　旭宇
山里や夏なそりぬ色もなし　金陵
ちりまり水に月浮り鳴水鶏　藍紘
子月夜を掃出す庵の名石哉　應汀
雨あしの一筋切りや笞の花　湖風
花ほとる嫁帰へ舟さし入宿　梅間

桐の花ハよすから落て静かなり　三六 和楽
三日月ハ塀の隅より出たる　ゝ桐扉
ほとゝきす月ハまた葉の下やとり　九岳
かくれても川音高し水のうけ涼　大阜
晴そうな空ハ時たゞ杜宇　巳ノ 巴圭
涼しさハさても羅すき涼舟かな　鷺洲
凌宵月よりもつよき西日かな　珉上
松ふかきハ滝のつ経し杜宇　十六 長好
五月雨や日暮しの西の山　莫山
栗の戸やまその蝙蝠をと錦　栗大
若竹ハ春高き様よ生きたり　三九ハ 花春

ともゝ子の桜をかけうそ郭公　ゝ素葉
竹葉船
垣越の三河の山や燕子花　十六 采彦
芋の根のむすぶ蛙も清水　万賀
さしむかふ月の高さしさよ蓮花　呼夫
秋ちかふ秋よ物よふ秋涼し　鵰南
花搗く流ひかり夜の月　騏上
夕すゞみやひとり形すも松の月　亀雀
晴の毛をとめきかり萩の花　三九 白露
卯の花や浮葉の色家道　路向
きのふかしるや今朝帰へきに　三九ハ 卓池

田植うも山から〳〵土ふまず　棋洲

櫻子によるひまもなし茶摘哉　三千彦

山居

まつ月に轉しる岩や多のもき　康野

枯も寒し葉末の三杉家　秋峯

枯尾花山ざかりてもるひとつ　雀人

枯まつやはつ蕨山の鹿驚　竹有

草庵

枯もなや月に八文扇の風喰　士朗

米ある時は里より枯小豆　良平

秋枯や白田のうへのいまのまき　普天

蘇めまぐ[illegible]　樗康

秋寒や母の飯喰二三日　桂阿

あるきあ〳〵萩の花喰鎌に　舐糠

兎角して日数す〳〵や秋の花　麻芳

秋の秋のあるけかなくれ[illegible]　永み

甲斐草丸文音

柴の戸を露にぬるゝや[illegible]　草丸

可都里ッヤをしるを三ッ書付ヶれ

すゝきやら嵐雪ハやさしく顔を払す

名月や昔角ぬれてきて杉の霧[illegible]

十六夜や[illegible]山花の[illegible]

五雄三河の卓池同携し一宿り
枇杷実に入風涼しやあはら
三吟をはしむ

嘴の鴨あまに残る寺かり外　士朗

山路すゝし雲苔のうへ　五雄

茶くみぬ人を迎ひ笠取て　卓池

井筒の淀のへる涼もなし　朗

縄すまきを中ゐへるゝる後の月　雄

廉の常着のゆるき柿の木　池

叢藻ふくとる勝負を賭けし　朗

仏ものとよまふる良を離れて　雄

降雨を老ろ洞と謡めやり　池

大井　蕪に捻るうく乱して　朗

照の花はさくらと見るまゝの　雄

浪のおとまもかしまし自代　池

肉は二八の盤を反まなる　朗

いともりしき五位の公髪　仝

象の名付風はいつもの風情　池

笠をかぶり雪の布井　雄

白くまくその春を背に顔て　朗

婦歯の松よ何をとふらん　池

のれうあする　林をまへにうかる雨郷の旦　雄

北來の帷家砂川乃砂　朗

やすしもあき峯そのきたる賦の上　池

先をしをら生歌なの法論　雄

りえ千す楞樟子の穴へ突出して　朗

葉子刃りをる慈のさ生云　池

糠とくうちさへ人の志のいして　雄

小庵の戸は科ハありけり　朗

旅の窓の鳴りなとぬり月の影　池

下りすもしとこるす檜まりする　雄

風流ハひさゝるさえしのと誰まし　朗

身も法主ら生ぬ旅の（ぬ）りなそ　池

皐池三河ニ加へ家

文化八辛未仲秋

泣瓢集

北雲隠士東にし故郷にとの
帰り久過を愛寸忘年拾遺
に閑留守をなりてはおかりく
常には翁のふく垂少し
ち話かり起して神下にま
むらふ時まて鶴難し
知らけをとうむすとしきは
末魚としてはるときうき
人のその帰く色わしたるに
語多かの耶を能く大泣に

批七部五十九

南華出しゝ周辞しけるを
こゝろより今よそにもれ侍へく
なき婦久原とゆふ妻宿の
木の枝をしかみさりけるハ
爰しましるを秋して飛ぬふ
あはこそ露くひるあすれ
もとのなるとハ
古し泉

早苗の勝をしるる艶去歩　大阜
秋ハ松茸苗し珠宮のしな　北雲
霧の影のおりの山の妻や溝ふけ　墨山
松の中ちうの鉢苗りけり　彭湖
名清し出るおの栖して　馬秋
ことの都よ捨し皿鉢　阜
雑談のたしかする馬の諫迷　雲
さしおとの座敷霧の装　山
あとりの道発行る河ゝ畠　翔
男ふくしと酒買よ出く　秋

約束ハ家馬ありし夕まぐれ　阜
二日の日かゝ月の相宿　雲
あとゝいふ人ハ旅させける老松　山
白筆えらり筆の花咲　朔
浦風なかくよる浪のまゝ扇　秋
手ふりさげて錫ほはもとし　阜
玉鉾の露こぼれて八重桜　雲
鶯啼合をする鼓の音聞き　山
誰やらが睡よ似てる兄貴　朔
涙がをとする常盤夢からり　秋
たゞかなたる西根八葉の菜根　阜

雨もありけれハ雲のむらり元　雲
ほとゝきけれハ阿濃の宿に桜の香して　山
名乙女らしといふ小国の吉日　朔
棟上の餅をつかまくつかの名　秋
西天の釣をするとく姐板　阜
金蔵の蓋并手折りしき　雲
朝風しかる列氷の月　山
幣とる人の座のうつらしき　朔
世つき餘し伊達の三郎　秋
梁のむくき一名の古襖　阜
豆板あほし人目をくらん　雲

このころの情おかしや新築 山
咲ませて嘆き花の夕暮 鞆
連歌子たき火うつろふ嵯峨の町 衣
親子つれめの御堂にぎわふ 阜

大阜 八
兆雲 七
墨山 七
彭翔 七
菊衣 七

太阜尾張に帰るを
とゞめて

一日大山参りせん春の雨 卓池
素き袴の衆ふきはらしき 大阜
いまつくしに帰営のかへり来て 哉呂
紫の袱紗りのゆくる 膳立 池
高やくと鶏柳の続く彩の月 卓
うるさたる露の見晴らし 呂
縁つきのこ縫ひて秋の風 池
女寄りくり 蟻の声 阜
庭泉からし 草鞋をぬぎて出る 呂

ゆかりてゝ紅にゝ家を知られや　池

灌佛に海老もくひなけく　阜

砂吹よせて日暮る　頼妻　呂

昼はりとちいさき鶏を押置　池

あはれを雪のちくしと安く　阜

幾たびかきりて八鼓に鳴子綱　呂

磐にさし桜の出る関の戸　池

萩花に手のしく枝八なかり　阜

剣なこて加へ手天津丁字　呂

加けふに信濃田を搔き捨　池

得ふく津ふをて飾ふ翔の雨　阜

神雪に何をさへつる雨薹　呂

山茶花をりて伊行　ふらや　池

箱きりの袖短衣をさ八けのさ　阜

小半一の星の　光すれ时　呂

納ゝて八締鳥の面ぶれむすを使　池

むしろの端を悪る楢の木　阜

蟷螂の子く神ふて坂も底を　呂

六月きゝし半幅の　月　池

咋方に作を漬めたる刀研　阜

追く人のつぐる　松の雨　呂

古巣を花の葉かれし並へ　池

かゝせてをゝ志つる粉のちらる口　卓
お代はすふんなき舞ふりて　呂
珠数おくけ玉藍もなすりを　池
ろくしの古池の奥の森の音　卓
古きまゝをかける　其外　呂

卓池　十二
大阜　十二
岱呂　十二

くるまゆつ身を無縁のほまとし　大阜
雪のうすらく昔の一箱　秋挙
屏東紅罪中をなえて蔵るや　士朗
身のたよりの風を論てる　阜
銘樹を守まて居し枯の風　挙
あるものゝ音のひろみ　朗
いをあひの縫く稲き四要緩は　阜
行秋くさりて一床ふる　挙
夕虹の茜高きしひょ消かり　朗
茨の花をぬきれ売つき　阜

棠子来ぬ八棠の傾き出たる鶯　挙
二日道ある二毋の麦糠　朗
雲猿や行末もなく残る月　阜
安房須津の暢し荻村　挙
沸しさ子簾の色たる芒の穂　朗
笠巻も経もまち交りけり　挙
鐘やしるし登る日を花の出　阜
柳の枝をとらはふしまて　朗
海髪海苔品もあつしき家柱　阜
馬よめしる人形をひそ免ん　朗
度ささ十日ばかりも抱く泥　阜

蔦葛の這ふ闇の入口　朗
象使ひてまづ人なき蝉の声　阜
朽ちはさらし雀ちらしく　朗
朝鮮の秋明の雲の積みて　阜
身は大きみのそのしやくく　朗
新しく出銭積をねる幡の種よ　阜
杖はたそこの欅なりけり　朗
かゝる尾も駅は沼津の波の音　阜
蛸一本のおしみ喰わく　朗
堂宿み・衣をまとめて野詠ちり　阜
ふとんの端を寄りつける　朗

笛持て立よりしたる童雛　皐
竹の枯風花の末りを　鹿野
業平のめぐる小口ハ梅若菜　皐
多き夜にゆるく墨の露　仝

大皐　十六
秋挙　六
士朗　十三
鹿野　一

木隠の名ハあかりやり梅の月　沙鶏
ふやりしと露の上風　大皐
蒸栗子舟の花に句や程ふるえ　月底
竹をふるえて書静ある　俄雲
宮笠の四尺五尺と告て去る　竹有
以津ヶ朔日の白ふ人籠り　雨耕
草雛の言并木源く角消て　皐
ふるの若菜を摘ふ梅ヶ兵　鶏
行き関ふる家人の紺の落霞　底
藪子淘苔取に篭ヶ夕飯　有

似昴ふ日ハ揃ふ木ゥ新しき　不猶
蔓子つるまく井戸の葎　猪文
星舞の月哀なる鳥の声　呉山
老ゥきぬたの手習ひ好　雲
御吉野小宿をとる寸法て　卓老
生よかくさを居る兎　日　楚山
一天の来るきを範とすゥ家あり　座
長至麻しき仲麿の友　皐
下京の恋ハ高瀬のよ辷り　有
小六いうしふを泣出しよかり　而后
徽雨ふる鶯の窗子閉ぢ遊し　鴻

藪鶯ハ藪てとしよより　金樵
萱堂ハ加の墓参のさら見やし　皐
かをくよ追まて石拾ふらん　元
裏の手の朱ふきて来たる一数　有
御盃ゥ口よ引法く　猪
平身の句ふ揃をれ揃め　樵
すらし氷の菓よ花もの　座
機おもて鳴ゥ三河のさ留は　閑
双六うちよれを出ま留　鴻
炬燵しの梨ゥそひをれまね　雲
聾よ位のそもくきく　樵

おちき司の何列に細か草たゝみ　枯
松のおほろハよき餘り菊　閑
川上の柳に花の香を添て　老
志はしとておそ立と寄りはし　呉

沙鷗四　鴉閩二　大阜四
呉山二　月底四　卓老三
岱雲三　楚山一　竹有四
雨耕一　鑫三　不請二

浪華昔遊目十数年于茲
雜髪留其地郷人遂建碑
翁の石の面にハ髪塚たりの
方に

押よせて細き葉咲九月　大阜
塚を流るゝ鳧か枝のしつかれ　魯隠
つ前のうけ縁ふ日に絶ゆ　鵞雪
杜園と解ゆ伏板の月　去兮
赤つ秋をするゝと井戸へ取落　冩
雑も出雑にも橋ままつ生　雪
余念うして寄るハ原さぬ生木志　兮

ゆきどうらこの風さはくらんで　隠
ゆふ時ハおもひまけて寐る世　雪
蝶の肩をきる夕白の花　安
隣すもおもその綺をきさ縫　隠
おもしろく入笑の杉や舟　雪
秋の月かゝやく年さし登り　安
鶺鴒とくへまゆりくよ上臈衆　隠
昨の衣の雨中も海さる縁ちて　雪
かよはき枝ま八重の花咲　安
衣ね生ハうれき事もかりまさり　隠
梅よろし冢く島のちくや紀　雪

面壁の白字さし業の義かゝし　安
かゝりのよりの香の名妙　隠
向佩ま苔厳原の祠なへて　雪
書ら浮ひ責るらしのえ　安
すれ紙ま手習ふまやさう頭　隠
世をうち川ま流し間引菜　雪
醉ゆさる業平の上の三日の月　安
系ふくしの獅子ら龍。出る　隠
いくとせを極まやまさて筆のさき　雪
玉のやうなるほしくきまとうか　安
綬衣の国さ倫。筆をとう面付ゟ　隠

はつかしと声のたてし海さゝ　雪
秋さとに家號の車たしかなき　交
汐海をいそく浦の年寄　隠
のむよりも日のさし出る海のよ　雪
笑ひしと胡ゆとになく　交
持蓋の花のひかりの涼しさハ　阜
つきも角く白浪兼津の声　仝

大阜　三　魯隠　十一
鶯雪　十一　長交　十一

むら鳥の守山ゑし夕時雨　硯静
馬のふり色よさむく枯芦　大阜
新治のあかりてつむ穴蜂て　大巣
十日の汐のさやき豆飯　呂川
また出並ふ櫨の身の振り石　周瑞
萩ほし冠をあそをふ風　静
なかし縁にあけを撰る秋の蝶　阜
出替つくたひも非垣　巣
袢の子に糠さくくまぬ木下闇　川
罌粟たしよせて株へるとも　瑞

山ばんの人はゆくしとふり向きて　野喬
小町が塚にうきを語るか　圃暁
さやけきは月ばかりなる丑の刻　静
安にゆのかし杖の枝折戸　阜
岩もる水に鳴蛙の声　巣
都ひん日和に出る雲より　喬
多抜くしやうし寄の松花の風　川
連歌はみより書は草除　静
花はらう家に拝まるゝ生ねて　阜
縁つらしる寒の梁月　巣
浪よする香く良酒のゑにたく角　静

紀の路へ行か五位の一群　川
うき隅に目のくゝりを泣汁　巣
あるみよ髭る袖のみを摺　暁
それそとは誰か見ん花かな　瑞
夕暮もやき鉄の消かなさ　静
木兎をとつらする鶏の色まかり　川
豆腐よひこむ大寺の門　巣
三日月は月のはし多を柳蔭　阜
勘解由か留主を稲荷の前口　瑞
廉咸をうは払ても面ふき　静
ふるての紋のちさき山里　川

乙のゑをほしかる方へまゐらせて
画ゟも書き咲ぬの　まる
こもし定らし蔦の咲こむ絵の具皿
水まかけるふ子種となくさ

巣
阜
瑞
静

硯静　八　　周瑞　五
大阜　五　　野喬　二
大巣　七　　圃暁　三
呂川　六

ある日亀翁を訪んとふらり
まゐて訪ふ翁不在なり
残して笑瓢といふ
その翁ハ庵にて盞にて留主の間より
鍋茶釜にてふく茶釜にて瓢を提て
身の滴りちひさき紙の庵かゝし
桜色ハ葉の緑なて亀を結る
鶴活くとふけて亀山の枝を告
ちかくとすて詠み掛ひ玉ふ

士朗　大鶴　海翁
朗　鶴　海

文化八年辛未　猊月

蓑虫集序

蓑虫庵主なる勢州の初秋の夕ハ木曽と
の渡りに住てやさしき秋の夕庵の艸扉にかり
蓑虫をなる八月晦月の七日なりけり何となく
胸うちふさぎいかるやうに覚へていとき
常きこゆるに遊法るゝ覚月廿日
宮巴身まかりぬと告ちをたるなり
このかなしさに絶へく降たなかなし淵
ありて思ふにその世 竹苗子 里比
枝をなからして巴子か摘島梅に以陀植
袋をおのこし 桜島といふ集作りたる 七

批七
五
上五十一

今ハむかし

冬ぞ鏘るおとゐよせする蒼々か　竹有

木の花ふかうに寒ふきつゞる　士朗

さまくしの鳥の寐よ来る声をおそ　岳輅

落七株三日月の　月　棋間

秋ハまたくおふも一気の名こなり　方明

ゆかいあらしてえとしる川上　国水

松の木にと面まて馬の綴とり　朗

ほかしと為る面をゆめある　有

閨の戸をむさいよ呼く朝顔　間

いまうさ船ける冥うたらし　輅

葬を橋の河おもく吹流け　水

豆の黄の這ふうけもすし　明

霊きりハ月のけしきをくわえ　有

ちのきぬたそ河つまありける　朗

醒井の為ハ山てもうそ寒く　輅

駕籠にのりても笛ハ杉されし　間

途よ影さし花のひとかすまく　明

革範よくまる幽菴か美　水

鶯ハ何よまるとく鳴このう寸　朗

ます従てもみぬ其のゝく山　有

筒井筒井づゝの石の苔むして　閭
朝白うけゝる手の窪の飯　洛
兜巾きぬ人ハひとりもなかりけく　水
笹のかこしに宮をとゞまり　明
うき旅にきくなミの声古き寺　有
ふミ蟻捺し灰を捨られ　朗
西切にはらひ過たる銘もわるき　洛
ほそなりも西の稲つま　閭
丁一羽ゑ百千鶯くになるなり　明
菊亭との柳なり出し　水
名跡も二階住居ハ物もしらく　朗

三日採たまハこゝろぬ脚拾　有
八重霞雲雀鳴する夕暮に　閭
大かさ毛も皆そろひそかり　洛
一蛙なミなミの白ひにほひけり　水
泪ゑ人燕留をいく　明

尾張にまゝをやくそまるらんと
品くせし人の名をより出す
こゝろ泪ハとくすゝきりけり
いひ甲斐もなき世に老ぞ枯尾花　月底
孫に淋しき紙衣の袖　永安

さらくと湖にのる舟を押出て　沙鴎
ものすごきも月にあかりけり　谷卧
粟飯を焚ハ誰やら覗く也　烏旭
端をけたる腑さしの露　すゝ
ひらつらに晴ゝしの草のきつき　東阿
花を入る音の蝸牛　宇仙
兎に角にくらゝの部々　青峰
わきもむらさぬ蓑輪笠鴻　底
餅くれし縫座の担笑ハ仙を　安
折をしまる風の蔵尾草　鳴
渋ふる夜の峰をこえたる月の影　臥

脂ハ理因の音に嫩くたり　旭
うるさいまゝ訪んといひし部人　之
雲の西日の鎌を乾かし　陽
ある花の白ひを露に曝して　仙
葉の縁る虫のかほうし　涼

悼

冬籠さつまの多より吹自は　ノリ 岳栢
黄そのゝ吹そてり鳴鳥　十六 長安
菊枝音白き仕居る露の下　立蘇
香思ひのくも我に去む秋の露　扇巴

いなづまきハまのさかゝす荻秋の露　五凡

落るとも露ハのこして二日の月　嵐交

松のつゆ山ハ二日さへ露のつね　津凡

西日はす堀をこえる暑かな　里桐

月やおもふ垣根いつもの虫の声　素玉

おふよてをされハ蟋出にきりぎりす　民暁

まくの秋のけいきもいかならう　蘇人

手向とよ手向く尾花の中の露繁　天竜

秋の日の静しきとの手紙の下露　西滸

り秋の星をうしろ堺ののゝう　岱明

手向とてやしくれてぬるし　林氏　蘇酒

粧ふかくかたり凡の楢の露　林志

菊の花泪ふくろふに向けり　稚長

絶のようきの秘もとまて

時鳥庵の主ハなくならぬ　巴水

紛秋やその僧をいそがの露　只冬

こし方の空り月とおうるめ　蛾坐

次の間へ出ても眼よしむ蚊遣　よし

短夜の泪落しもちつてとも　かずて

暑かろ鳴蝉よりもまさりけり　つる

辰起ても暑き暑さかな　ちよ

初七日

塚暑しよれさゝやまてと蒼ほ　琴州

亀遅するゝとそ
留守の事ゝ家も亀の為ゞ
四十九日

秋涼き松も我や法の声

擲島楼日記

庵の戸の寂ハ富士より虚迄　（バリ）玉屑

冬籠人の心まてる米白し　巴水

松葉をたよる夕や月涼し　岱明

浮世ふや春する春する菜の花　（信）蒼竜

虎まても菜ハ咲て庵の家　（豊後）百兒

ふかふかく妻の留守いる蝸牛　（スハ）蕉兮

七夕の夕よる夜白し成なりけり　（筑後）一萍

今年桐をふる花ひらく蝶の声　（ブゼン）ろ虫

ともくと日の夜まさき深雪ゝ哉　三芽雄

ほめくと鴫の音ハまてむ雪となり　（肥ゴ）瑚璉

雪の松又夕ぐれまでもそのまゝなりん　推長

年月く行や一京枯尾花　（スハ）士英

小山田またつや夕アの丁ヽ一羽　（筑前）丁ヽ

枯芦の日ゝ今一日ふりまさりけり　（スハ）斗南

新田の松ゝくろむそ胡鹿　ヽ五行

辣叩ほ滋蘇の葉の桃そしく　（同）烏旭

きりぎりす啼やみし下戸窓に　維石

横に揺く父母こゝろ蕣かな　秀子

ほつれしと秋の最中く秋の風　羅風

なましもの気をそそらぬ梅の花　竹女

山形に日の出て月の山家かな　鹿野

菜の花や小家は低き山がゝり　千影

秋の雲胡明の名に流れけり　杏坡

丁の窓ひとつくに縄の形　文暁

生垣は米寄り人に渡りける　尺艾

ねぶりやうなき日和のつゞく桜かな　南明

雉子鳴けば散て鐘なる寺かな　柳荘

蚊やりせしおもかげうつる有明かな　由肆

秋田刈まには家懐へきりぎりす　八千坊

白露の心重きものゝ多き小家かな　竹老

本地ひきの子もたらひし本下露　素剛

名月は何の苦をなき屏風かな　大商

桐火桶にきらう垣は一山里ばかり　眉山

雑穀の花の咲まりを鳴きとめ　来耟

さゝる月の家さ雲さそぬ擣かな　春坡

あふ峠やちるゝ時けれ鳴子鳥　大阜

さりとては能く気色の菅　棋道

梅の花まゝにあらはなかりけり　梅堂

古猫や主ハ葛ヶ葉子なるの声　浪花 土筆人

根引して植ゑさし雪の小松引　鷺耕

木隠て落葉ふりくなり孫娶妻　尾張 有破

すゞしさや手子松脂のつく夕　洛 蒼虬

いつか咲いつか咲らん苔の花　美濃 左琴

枯の菊穂蓼添としてや侘り　尾張 卽央

主思な山ハ鞍馬ヶ時鳥　、金谷

蚊火やけなりい瀬戸の土あふり　、舎童

名月の空をと寐よしと鳴鴫　浪花 奇渕

冬の日やつるし水のよをてる　淳石

何時そ雪つむ家の飯けふり　江戸 李基

梅柳たふハ若葉のさかりかな　尾張 駕凡

家名ハ人の東よいか梅の花　、沙鴎

露ハ世の人の音石と山かつら　、浦丘

名月や菊も見殻のうつくしき　飛騨 存

飽までも霧やうつりて静かなり　碧山

雪を起すくす雀も追れ火てたかれ　尾張 五雄

春の朝く見ゆ世ハ時雨の山となし　、岷江

我人も旅人とみる柳かな　浪花 外六

家の春ハなをりく朱の宮かな　肥後 熊本人 綺石

七夕の月も秋ハ義子か会きなり　尾張 岳輅

夕くれに手を写すてるく時雨蛙　、すゞ

露入まて咲や井手に妻の菊　信濃 雲帯
梅咲くや押継に住居す　其應
鶯やこの節由けハ藪小路　三河 佳雄
人妻の身をかくして枕売し　ヲハリ 国水
朝寒くしもの初瀬の根深汁　、昨来
月の夜か毎夜になりて秋の風　、菊人
七夕にうつくしく出す利渋茅す　出雲 花叔
鶯や二十四橋のをちこち蓮　尾張 九岳
太鼓もなく村にみかり雲の峯　、家井
廿日過き月の倦すさ涼になり　浪花 萬和
春の夜の雨のこりくり庵の外　其道

ほとゝきす海の光や夏木たち　大津 駅道
秋の子にとくハとのか菜右より　ヲハリ 杢也
月の雨に二人なりし旅町　、黄山
時鳥啼や尾をもてふるまなく　飛騨 怡亭
猫啼に二足三足初しくれ　甲斐 可都里
たまくなる日ハ出ましゝも八重霞　雲羅
別るゝと思へハきしゝての扇　ヲハリ 桂五
まう日の蓄てても雪の山家かな　、永女
一雁ハ雲絶に鳴く川田かな　洛 茂良
行秋の跡もたく高を現なり　ヲハリ 武草
小春の暮いつまでて山鹿を捲き手て　大ツ 五来

動かぬハ何れそかし冬の雲　ハカタ 吾来

白雲も橋りて冬の堤川かな　尾崎 春堂

正面ハ松の何よまるの畠　尾張 野乗

手よ觸ハ乱すまじきの芒哉　、月底

山人ハ稽とゆふ寺り閑古鳥　ミノ 千阿

名ある様梅ありしひなよ人かまる　ヲハリ 朱月

降ぬのミぞれもしかし枯尾花　、吐山

出かるや雲良ハいかしの山の陰　イセ 不卜

出の来を翁も捨られ神機　信 希言

経緯の麦くまで枯る薄かな　ヲハリ 百樹

うれしく遂甚し寒の宵詣　、松菊

紅梅よ鶯ふたつ来て啼かぬ　、天老

余波なきまま雉子よ焼野かな　浪花 魯應

小雨そふ芳草の中の柳しぶ　五嶺

鵜のよまた葉のふくる若の雨　三河 和楽

花の縁生一日なものかくもかな　江戸 完来

枯尾花象頭ひの恥しき　ヲハリ 駄六

子のやう小蝶をさてそまる人かな　、亀六

菜の花や春かくれる薄かな　洛 六溌

何よたとへんそも水無月の松の風　仙台 巣居

稲もすかし笘の雲や露附あ　免雪

枯し地よ唐黍かしの垣ねかな　ヲハリ 阿城

朧夜に似たるすゝき野柳かな　、呂柏

冬の夕雲なき山を出にけり　浪花 買凤

松かけや蝿にかまれたる椅筵　イセ 椿堂

干瓜や旭のちやき蜆か里　遠江 素棋

一日のくらしをつめや鴫の声　下野 李暁

明ほのや萩より露の乾る　立而

大仏のうしろのくもりに萩の風　長崎 吾友

露かり安きもの〻胡蝶の心かな　ヨスリ 我丈

花のちる秋ハよりとて風吹か　、圃暁

松風の見へてあまたり鉤葱　、竜舎

月雪や師走ともくらす天王寺　、對我

批七郎五ノ上廿九

魂棚のかに灯のちらつく家かな　、棋間

何もかもこと新くさし杖の露　江戸 こちぎ

きひしさの扉に残る夜明かな　三河 普天

鶏頭の果かくるの帰るなり　宇治 在中

枯おりし猿の拍子も一夜つゝ　下総 太錦

棋の香に志らぬ宿の朝日かな　一章

元日やとまれも花咲山の形　信濃 嵐外

夏しらぬ餘との峯し菜子麦　尾張 硯静

月人に霜のうる峠かな　、謙髙

さまかなる雨降うる田かな　浪花 瑞馬

後か〻との遅く茎　礁　洛 月居

猿の乳のほのかにきこえて鳴鶴　浪花 米彦
霞から尾上の松の日なかな　二長
窓明て雪の行衛旦に　鳥功
若菜の若みとりなる春日かな　エソ 少汝
青雲を鳴もなかさぬ虫の声　ゝ 冠市
青柳の影ふむ路を姿なり　越ゴ 喜年
東明ても蚊のなく所や梢の花　シナノ 素蘗
墨なるほとよきふりの月夜かな　可立
家すゝみ梅のふけたる戸口かな　下ノ関 憐霞
十年も同し影なり猫　竹　エソ 盧橘
をもへとく雲咲草もありけり　江戸 よし周

日の暮に出るかの浮さし柳かな　洛 棋價
菜の花の照らして僕り里　ヒユ 萩里
菴ひとつ拾ひ出したり山桜　エソ 秦浦
涅槃会や鄙はさひしき梅椿　七タ 雄渕
須弥の秋をとくしく志ける猫の恋　長崎 其映
秋に入りいなや出てくる蛍の月　イセ 丘高
鷹狩ふる月や菊の影ばかり　エソ 吉甫
炭焼よところ花は見なれける　南暁
浅茅生や古貌の上に影ほそし　仙台 冥ゝ
旅人に行燈うつし明日の菊　鳴沢 葛三
梅かきのさの秋風と答りなり　筑前 泉左

筆硯捨る日ハ寂し艸秋 廿七　ミノ 自牧
鹿の音の哀をさ海に鳥かな　アハ 葦泊
子多る水の面や富士の影　ヌリ 可青
夜更けて鴈か啼そ急の月　、都暁
口ノ嘯て霧秋ふけり山家かな　、暁吾
竹椅りのまき案宅の理花かな　アキ 玄蛙
穀かけや芥子一ツ手の鍋月秋　クルメ 文角
嗚呼ひさすいきよのある竈かな　兵庫 一草
素の山同しさすかハ会ぬなり　ヒコ 岫九
白露の零るゝ迄にこ浮れ哉　芦 春蛾
すゝしさや瀧を出て名月なし　ヌリ 竹思

涼しさの月をとも見る蟬やなかり　浪花 春思
須子の月は三の秋か何處か行る　明石 蝸国
月と日て世ハ行る紅葉生海嵐かな　ヌリ 谷卧
麻の葉ゆらしら高ある東雨かな　、佳楽
湖水朧月秋ハ露か ふゐる　、野喬
黒谷ハよい名なりけりとききれ　洛 試李
合歓の花塘へ出きハ日ハ高し　飛騨 儲史
白菊のぬきも白くぬれしかな　ヒコ 對竹
萬古香飛子切やし竹の窗　ハカタ 歸来
冬の菊盛りしく高の香りけり　ヌリ 大巣
大ふさハかくふく高の小柴垣　、宇仙

里人ハ鶯きくまでいとまなかりけり　長崎 蒿也

何村てゆらら霞の鍋内のむし　芳野下 于當

蛙の声のゆくすゑ高き雨夜かな　つる

山寺の屋ねにそよけり春の雨　イセ 推巳

鶯や一むら越の大井川　ヌマリ 秋挙

取く雲空出来て梅の花　黎阿

三吉野や雲の華八按かれし、東陽

冬鳴く鶉の萩嵐吹ぬ　肥ユ 巴人

十六夜の雲八花まかくまかりけり　ヌマリ [illegible]

梅かをや旦袋かけかける垣、士竜

水の煮八扇てもはなし小田の厂　太 烏頂

来鬼ま似やきせくかり錦 竹　三河 卓池

うらうらしく朧ハ[illegible]芥子花　ヌマリ 大蘇

つまハ山をおもふ[illegible]の月　長崎 鞍風

ちらしるや[illegible]　越後 岐東

とらの世のたゞ[illegible]菫草　伊勢 翠川

何[illegible]湖の面　尾張 青磯

何[illegible]の世界[illegible]　平松 亜渓

門[illegible]　江戸 巣兆

月古し橋ま[illegible]　ヌマリ 素仙

[illegible]小松の中[illegible]つく　大津 宇洋

夏[illegible]月[illegible]山を出る[illegible]

はさくらハ若葉に花の名残なし　一松

いふ事てハ雨をもふらす山さくら　里桐

松風や白ぬすくへぬる泊馬　浪花 麥太

むく起に旭と朝も柳かな　尾張 其幽

美ものゝ入叢ゝ涅槃かな　洛 丈左

漣の岸もよろし暮の月　立蘇

暮の秋や蓮花の根に行衛出る　信濃 蕉雨

附子ゐるや秋さへ透さへ外の夏　甲斐 漫々

まつ杖ハいやてもまるよ葛の花　奥 曰人

暮の火に手をさしむ秋あつくふ　ちよ

象形そ五尺あるまで坊笆　よし

鶯や我なすへくる春の雨し　尾張 閑樹

ころころさすれ峰や花さ白の錦帆　女 翠山

春の野に猫もさすらく垣ね哉　近江 砂文

力なや秋にあまりし茶の土　江戸 成美

秋ハ更けたり野の一筆の鴨の声　ヌリ 野秀

今年くる日の一はなり附飼なり　肥後 栢堂

紅梅や桜もちる白小甲斐傍流　眠石

桜さきさき世にゆかなる山桜　尾張 士朗

石川や石ハ根つよし五月雨　几翠

蚊屋のさゝぬ秋そたのしんの附宿　民暁

世忘れてたのしり入なりまで芭　仙堂 乙二

雪くもますまさへふ日の寒さかな　尾張 方明

志つかさの菊のよそする日和かな　肥後 標雲

鶯やあきらしなくの枝梅り　和水

星てらや笹葉の露の影は　琴州

落葉くも松のよそり冬の月　西滸

七種や芋の中にも梅の花　尾ハリ 五道

我宿の鶯ハ人につまされり　、白之

東雲はさゝしこのつく鶯かな　近江 芳之

戸口さへ蘭をハもどり菊の花　肥コ 夢白

燕来て明けハ売る草鞋かな　イセ 乳阜

枯尾の戸にさきするくいつかな　ヲハリ 徐英

しくるしやうつ川中の蘆の川　イセ 李東

起き形は蕨くめる春の露かな　推長

舟つなくおの子ハ息し秋の風　青梁

夕きりや耳くの魚市　ヲハリ 標

宿かりて時雨の名白さて居り　遠州 木南

月雲もさぬ本兎のすゝきかな　尾張 壷屋

蜘の巣のふるまて来り初時雨　、呼寂

月影の仲もくろう涼しきかな　肥コ 兎毛

何書て見ても沸しき團扇かな　ヲハリ 竹有

戸明ハ萬葉つゝる住居かな　只冬

蛍神く増くの名を若子の花　筑後 其成

孫とりさハ山家の梅のちる日かな　遠州 素棋
雲の横ちるやうに咲し菴の梅　ヲハリ 斗石
蒸ふ外うり太紙前に縛ゝなり　〃 朝蒲
引杉や何をかくすの婦ぐつミツ　〃 周瑞
初ケやしまてアえし筑波山　〃 つゝき
淋しさや松の高さの星の色　〃 都舩
ましら啼山へも遠し窓古雪　浪花 虹宗
秋寂し蝶ものいはゞ採もやらん　尾ソ 双鳥
父母の影乃まりん年のくれ　ヲハリ 示美
照る日まくへかゝる(?)てちる桜かな　イヨ 標堂

父の録句のこのてありし落古のうつりに
のありたるをかさしけるくも嬉しくも
覚えくし巻末にうき託しぬ
鶯の春て鳴ぬ日ハなかりけり　公呈
書写し居の端に鳴くかほ
元日やむかしなかりの山形姿
何宗としらひとつも禄りん像
姿もすゝきる安丁の名まかな
沖の瀬ハ踏にもとも汐干かな
引妻をせすをしまん人もかな
今朝ゝきハ志ろ静し山桜

降やかんハ焔すゞしきものよ妻の畠
菜の花をこゝろや眠や松の影
妻兎や鶏の尾を引菜の上
春ひらり風なきしきの妻の畠
小一寝ある日和りんとしたり初桜
春影に押られ泱の蛙かな
松の花春もなくても寒くて
むら雀妻の佛山鳴きらし
白き雲をも絶ゑたり夏の月
戸明る八秋ハ菜の葉哉
文八誰ぞ妻の中の一ツ哉

日暮る秋ハ香のむもよふそ鳴よなる
かくてこゝにも日ハすぎたり前俳
網かしとて秋ハ空の果をすり
鈴も雰き雨もなりけり風菜なる
刈り取や海ハ海をとく波をとる
きのふけふ名鶏鳴きよ泊なり
けしの毛をつくるかすら白をきえ
名庭すとくけ浮巣の雛の声
生をるの物のひとつを粟の花
人里の遠くもかくして果名名
大空ハ何かあまやかう　時　名

秋風の吹暮しより雨の松
夕月ハ雲にかくれ出し
出るに見えハ只啄木のひとつぶ
朝良やとなりの秋も咲変り
ますゝきと綿もん入たり露の月
早稲の実の穂にかよふ薫ぶ
何ごとも淋なりけりふの月
きるもくは枝戸押へていよう
冬なきにやすむる秋のなかなか
人に行く萩の中に立ち通りけり
誰も経をうけて葉落の天きぶ

降出さぬさきより沸も秋の雨
秋風や狭き色の細さとえがくれ
絶ぬに筆てそよぐ色小夜砧
人数の床しき様の月見哉
廉にも峰下も鳴なり様の月
秋雅家薮かつらの粧凄し
瀧流る流れの流れよ鳴千鳥
世を廣く包こめてに冬籠
丁もあし萩のかゝる　音
ともに楽と藤かすくるる風
冬枯や庵ハ木葉に埋れて

宮巴ハ綫之の象ゟ纔也　或叔
の由を見よ此筆跡まろきしる之人
は墨客そ登以へハ宮巴出古者へ
可榻下の應接佐須本一致なる也
右を姿義表面照於人
筆ホつれし跡の猿猴ニ
似ん乎

朱樹園人
士朗

玉兔集序

枇杷園ニちかきあたりる隠人
墨客の序ニ對して狸山の
ゆかしきを出びみハもうし
今狸作るよし書に筆を

遠らきて句をいひはなちけるを
梅叢手ぐさに取はやして
玉兎と題号津々浦の跡数様
斜陽なる月と梅とのむつひ
よりいとなつく

梅閑

玉兎集

○郊外の月を見んと庵を出て行ほどに
二里斗ゆきて寺の前をおもへば松の本
陰のいと細き道ありて其の寺縁あれんとも
わけ入れハ寺の前をたどり行ハ露のあかき
東なる寺とつ家ありて胡々の楼ハいら
なきんまり縁も無く萩萩を掩ひ落ハ
東西の径をとつ池の辺りハ瀧さかう人
後縁の杉として八株木の枝打ちかゐる
ハ滋て人きり無き深ふも

いろ〳〵もなく飛ちよひてかきし侍なり
石燈籠もまハりけるすきまなく苔に
むしさびたる百年のむかしを忍ふしむ
木ち持りあり小塀をも出離なとの鴻
ちらしあらふなにはらんはなきかへんうき
なし社ける人や経ふるかしきんさすかに
築地のあとゆきまきる\くもあしき
古寺苔むす経の料かしそかゝる梅を
けるえなしますさとるほいそすおよ
月も出ぬかけらん人かへるらんは帰
くまもなきに松柏の茂る寺に住しける法師の

露分ても尽きぬ蟋蟀の鳴も濁るにもの
たえまなし月の後かる涙もいふにもて
あそふらんけに古ひつてありて庭にある
げに西の小宮にも月に我物ならる
松風やいつしか庭ハ月のあとの　鹿野
◎月ひとりをしらかたの今宵ぞと　ハ
古人一露か風共なりとしの秋なる人　誰
彼月の名たゝる所く縁を結ひなる　か
帰ハ光陰しる出たられぬハこの日の　月
の光るもすこてさすまひ歩りならぬと
去年の花と離れ咲て去ぬハ歩むま

似あはしき老人つとひて踏舞に踊り栄
寂たる月にむかへハ日比の友に逢し心
地そせらる
江の上や機を忘れたる月の友　徐英
○いかにも脊の高き山伏のいひけるハ
招出たり太なる月ハ出たりし宵十六夜にて
五尺斗の月か出たりとしへハ招古く垣
まてしてて出る人招ちはさき月か出たり
狭へものゝ色きるとの月か出たといふ手本
弓紀の雲をつらぬる額なる　男　紗
いひたり、脊の高き人ハ大きに見え脊の低

き人ハちいさふ見ゆるに似たく蕪釜笠なし
と有をのせよそといひたる
言月ハ月のいろはよくなくての月　若水
○芒ハ月に紀て淋しく月ハ芒を出るす
清しとて宵あをあ山に尾かけて　瓢の
酒よきる膝にかりて松風の如くに
見まし入浪の梅に高師しまいひ然
鉄てむきを詩ふ南山壽
月夜ほし紛来すて伴にても華州寸　田江
○つちに数翁ひとりのちさ子をも患へり由くま
ゆるふるの代もまへしともりつさまし　も

大嵐の後ハむさしくて手に婚まる紅の
錦ハ錆色く綾のうらの玉ハ錦に
宿しなきたまさとさるゝなり燭田の
杜のゑもいはぬ草の色かはる紅葉七重へ
何さまとつきせしも枝やまれ翁あやまりて何
をかしらをんと言ふりましむれにこるまう

○莫芭葉のみな帝とまり八秋の月　對竹

○篁は簾あまうれ八ちゝ人の得なり
月の林間よいさよふ地そやまる
三五夜の空より浮雲八なしさし　葛安

○紫月のけしめ屋根のあまりつゝ日てそこ様

家ぬての錦をなかぬ月の枝ひなりたり
今宵ハ其樹の翁ま對しけり
何の木のわりもいたす松の月　奇渕

○淵梓のおつ落したるゆふへ月たそき
畑にたつ
鶺鴒ま日ハ押よせて秋の暮　栢亭

○月に作りまつるものハ簾る事もなする
すといふたまき言をきりてやう／＼のちろ
よ三日月の君まつりまつりその御なり
ゆきをうちひ待るあちろすうこの男なり
なかつ事もまれてふて風流子そをち玉ひ

よひくるしに御名ありし萩の月　木か
それの月にさしひる御名も松にまし
なりこの名ある素十五夜はなくをもつへハ
あはれく御名世にかくれなく名月と
中秋のひとりよりも月夜月男と名のまて
御宿当るとなる

○月にまつる葉ふりハ松もなし　東陽

○江戸ハ河それは嫉妬ハ悲し不破の
関屋ハ紅粉も網も
ふ破の月泣るん悟ハ来されなり　秋峰

○枝ハもの それあらはれなり涌ハそのあハ

それをかくすをのハあすの月ならし　もを
櫻になるとも一夜を明しぬる
咲ゆるハ萩の花なり胡の月　燈呂

○さて地をもとるる一夜にあわり額に雨月
の二字をとりつ両ハ瀟湘の夜の両打に小舟を
洞庭に浮べふりやのぬけるまでもつくろけれ
経の時まもたるるとも逢うへれあまりぬるま
河ありたるを見ずとも加あふに不破の
あまてらも夜の笠を脱ぎて
晴天に月の面ある本のつるかに　棋洲

○むかしく　二むかし　又一むかし　添章

二むかしのむかし既に椎なる木ありまし八
しばらく松月庵とぞ呼れける其翁の
庵に一旅人したるハきのよハ作ふの一世
四昔主人と口まだ名のらずや
四むかしの翁を月の五むかし　午風
○のさましといふより月ハうんかき
そのみそおゝしき出ごやくらししるまとハ
仁月さびさ嵐豆いつくら稀まようなりと
もそをれとも蕉風雅の様なれハ人しと
あまりてハ月やしら盛てしきもの八なし
秋の夜ハ月をちらゝに夢しけり　雪封

○清洲古城跡にて
行ひとつ月みつらんと抑もなし　雀人
○翁を慕むハ芭蕉の夕へ月にさはら
ぬしられをとして秋の気中焉で浮ぶり風
気くらしさず月ハいつのなるへくもなし
と書ハ翁を訪ありなんくせなんそぐを
名家に揺ん
初しより須戸すと雨ふ八月の雨　應汀
○二見の浦にて
名月を織ようかで萩の空　イセ 椎巳
○
閑坐

名月や今来し方ハ丁寧なれ　伊せ　翠川

○山陰

名月やせハしく鳴る音の道　イせ　肖我

名月の夜雪ハ絶へ鬼かわら　圃暁

○舞浦の跡へをはしりわるきしるし出るとのふし客ハ居られれ長秋の月　五雄

○人はてのひつも色取り月夜かな　硯静

○花のをとふ客り上遊死ぬと記されし法師も上遊ひ八陶家の古に多し強へ徒利にありてんと字し酒すきも死据の風流田可京し書附我子字なし

生て居く姉しや弟と仏の月　竹有

○不破の関人登の古跡に入る事となる書とよ不破の関屋の名月よ　平衣

○遠ハふ雪しもよ紀部とに降り風ハふけとも福寺さかし本綿畑の雪と降りハ人の心の何より先す上

名月を見れば山家の氣ふ外　卓池

○万册園に萩の花笠の里とてもまきをうつし植る有よりまとに写さき新名古てあらまほしり出し彼是に二ツの是も生ひぬ月の雲落て八夜毎に延ひ

松の朝日にかゞやきて八日ふく其光増りぬ
此是天家にて猫にふ琵琶ま似つくり
似らし似せるかしこしく是を写して
むかしの月とゝもにせし木のうへ　九岳
○あまる夜を翁ねる尉と名付て膳に人
汝り又栗田に翁ね給ひて炭うる翁あり
或時此粟田口の翁炭うりに来りたりしは
従者の粟田口に来りつゝ山にふかゝりし
犬の出てくみ拝してたゝしまり炭俵を抜
出して翁おりて家俵をとりひまくる尓
あるはいつもの炭うりに来るありかゝる

あしらひいかにしてもうちる志らふに物かなし
のくるあわしきをひてさることありけり
家産にあきを聞ひとるか翁ある尉と名
付て呼ひけるに鰥寡にして家僕なき寿る
ありよつゝく粟田口の家につてゆとひとるを
むのゆくんに始てかくしありしたりとかふ
翁もそうりて標塩出りぬあるしも
やさしきなまありて家産酒汲り一盃として
まふさいつれさへつしけりやれもしらつく
なりかましハ至らも盛そてくる翁も獺まさ
けくる中翁も覚へて翁かまれと取出しぬ翁

ほく〳〵と見をとりて海のはてまで
夕月を引かへりくる犬の子哉　求已
○すゝきハ宗任の秋ならぬ未来のあはれ
名月や旅立の空もかの山　若翁
○萩芒をわけて伊賀の山中より長月
老人を送りて袖をわかつ私ハ尾張の国
隣見の里　参りけり
松風の音明細き蚊遣哉　加賀　松居
○蓑笠ハ菊をまそいしんと言の月に
物をいはしむそしと言よりハ
姓名をとゞめて月ものいはず　葉山家　苔明

○楽天か詩に感すとハ蟋蟀を詠ふ云々
為らんなされハ蟋蟀の夕ぐれの露に梅しんと
まにぬる織女の斬鉞にさへ衣きせの茶居する
乙鳥の白ハさかしもしつりの財をめぐる
ふくそ小町か奇の傳はめてさくらも哀
のちまさハまゝもたのましきのしまして思ふ
秋の物なまをもゝつゝねて
蓬磨や月も薄の一本木　孫　杜農
○高楼に登りて鐘をつきしも山寺ハ
古く山川海陸の月を人くのらん古し
待る名所くの月松古しと自見の物不手

○我ハ庵に一ッの書窓ありて其窓の下に
呉竹あり竹ハ深く奥ふかく茂りて
日影を遮りて窓ハ常に暗とあり十枚
寂寞の菴を望みて窓に常住の大数を垂
さくこそとより子散り風情を見せぬ事
物を覚て窓下に机をよせて書に自然
の風情を得たり
庵の戸を窓より閉けり　黄山
○三笠山の只ひとり窓をとりて
月の出る山を窓に望みけり　野喬
○疑團盡空無躲

そうきしと仰る二階へものほりしよ欲のり
しを幸よ嵐の古巣もる月ふ　酒徳利
を参らせおの山めの峰よ河原をもち
ひも積複をを流し於じく深林をよとし
たるふさことよ飛ひを見下ろ見るすし
砧虫の音をを手枕よ聞き家の月夜ハさまを
おもしろん旅宿の月の夢ふとん二階の居
み古く哀さハ雪の香のむねく遠の海魚ハ
三千世界を我ものゝ如しく江八湖を松島
をうけ月さく多色ぐを覚えたる
大空よ小暖うちして月見ぬ
昔洛

○竹ゝ庵よ一ッの名寓あつて貧窓の下よ
呉竹河竹ハ茂く其奥ふかく茂りて
日影を通ふして宮藪と称す夜ハ
寂寞の声を友として宮ゝ中の大藪を吹
さくことより子献の風情をも見ぬ哉
ゆく浮世の机をよせて竹よ自然
の風情を悦ぶ也
庵の月夜へも宿と開けり
黄山
○三笠山の祢ふり高き寺として
月の出る山をも見ゆ学者かな
野喬
○疑團壺空無躰

名月ハ月にむかぬ姿かな　　浦且

○林にハ獨ゆるしたり月と翁とその姿
まてるさるなかりけり

言の葉も遠くなりゆく秋の月　　士精

○名月や山かくれても山のうへ　　七夕 乙丸

○くもれハ寂しく晴れハ月のかまびすし
雄山を見くらべ晴きぬ

月まつこゝろの定らぬ月夜かな　　對我

○名のりや何を廣沢の雉子の聲　　糕雀

○空耕しほる

蚊帳に寝ても只その月夜かな　　桃蹊

戸を閉て酒家ハ寐さり月の前　　三ノ巴圭

その家ゝぬ茅の中より后の月　　庭雅

○ちる花の名残さうりしもきのふ捨り　ハ
やう〳〵わび出る木の下に捨てさま
久かたの月やすてゝ来る毎にそまりまる

彩月やなにもさひの木の端　　彩燕

○秋の出る月をもながし垣根に立ハ同し
垣根に立人ありし萩荻の露やたつるとし
神社も手向しくも持る潤氣
も手向我に蒔きつゝ徘徊きその秋ゝ
名と月との出しいかなる人ぞとぞ

ものもいそにせめてつれんもらうかゝしく
是ぞ夢労のなよいさめくと挟きもし
ろ毎ひさゆし合も海くそかはしそしめ書
あらし其篁に寄りやしさ路もて家も
又帰す四壁の虫声さ岩に入りそ家
月さへ山の端にかゝりて只今入月も
なり無定の王子ハいつまとつんさハ家の
常しきハみなし便さしおひて月とある
消んともさるものの実りをむもんに
そよ夜露あ事をしらす
淋しさを語つれ共月ハ苑の山

沙鴎

○良夜山川しく月をとうくハ四季にし
ふとうるふ声わり句を詠まきハ又吹て
誰そとよハ毎夜と嵐ふ詠み枝し
この月の友や同しきつてよ小夜ぞ寄
月ハつよく浮きりぬ

山彦を月のなとハあらさりき

大巣

朝月やうるハやうてる月の秋

弄月巣

○雑木送春秋　一年三百日
煙霞薬此身　恐治愚癡疾

月雲和を離す枝ある歌法師

かくるさつきへるまさむとまハ今人よ

ところ〳〵見えていひつけもはをそ広さかりつ
み人来りまゐりて霄月まし橋まて出かりけて
ひさしや松の下中にてみなし枝くのうしたまひて
能もなかりして

山里の月取をはきく庭の松　士朗

月ハ松の雲にかゝりまゐる夜世まゐりもし
の薄くもあかりしと夢ゝ三更をすしむ

秋ハとふ月のてらのも草の上　梁臺

もとこくと笠て月をさす八江ふ　儲史

西の井月やあらんとまとりかり　関叟

草川雨るかさし出ふきよ月上二　夷栢

○むかし荊棘をひらいて十節、三椽茅さん
と寺地ハ湖有山のふもとに鷭苺池の深とり
ありけり

茎葉をも目の先にして〳〵の月　葛井

○十六夜

星漬をも招けむ雨に夕被りる　孔阜

名月のかすみ世界ハあかりけり　良平

麻帽や旅をこつやいねの月　素月

年〳〵や松をこえれく〳〵ふの月　保舟

湖をも一夜を有出れハけふの月　木常

○浮テ

ちかよ来て忘るゝ月の盛かな　美松 ちよ女
此出の月一年に一夜光りつく　可玄
いさよひの雲も出る月夜哉　三ヶ 亜碩
宵は月にむかひし蓑もなし　、梅香津
親二人子ふたり揃ふ留守の月　三ヶ 香鳥
椎の木に隠れ形も無き月　近江 砂文
月一夜宿して明ぬ草の庵　国水
更ぬはりとおもふて人の後の月　青鳥
柴の戸に後世迄秋の月夜哉　流芳
月のさえに阿弥陀ハつけたり苔の秋　如水

○

続き清書

月は出て八月を照す松の風　近江 菴山
日ハ西に月ハ東に野路の秋　珉屋
里人ハたく灯もなし今夜の月　三ヶ 楚雀
秋の風すて忘れし月夜哉　五道
つわけるや雲も晴れし月夜哉　可竹
名月の今夜ハ稀に晴りけり　三ヶ 千阿
しまのあかりに入ても曙の月　近江 文山
名月や雨も残の浦なし　与一 左
蛍ともいふべき氷の月　大津 宇洋
いさ親よき月の雛良の雛なし　三ヶ 棋堂
月に出る日ぞ姨捨の言葉かな　坂本 于當

○

仲秋

雲霧かし紛らし月のけしきかな　ハリマ 田實

雲ハこぼす雨の袋よ秋の月　大坂 米彦

月にかゝる縁にあふ夜よ竹の雨　得芝

いつの秋も見るき船に松の月　イヨ 樗堂

やゝ月の出かゝりや萩の以　近江 古猿

月の出やいきり車も松の影　二泉

枯風に月読はけし山の人　ミカハ 百秋

鴫一声茅に三ッ四ッ露の月　ミカハ 介亭

気むすふ夢に眠て、露もくふかな　子専

唐黍のまいうきにこえし嵯峨の月　杜月

名月や江はうつりけり鳥の影　近江 玉翠

名月や時ふる雲に草まくら　大商

○

成範が家の癖あり宗祇が雨の
癖あり素堂に[illegible]とハ芭蕉和尚の癖あり

萩芒秋やまことに行る月の癖　永秋

月つれて旅に居るさへいそがしき　イセ 椿堂

○

枇杷園にて

名月やまつりつらぬ松の陰　楳間

名月に雲のかゝるわしきかな　大蘇

松の月の薬なり月ハ松の上　秋国

月影を尾花につゝむ山家かな　几咲

○赤松園
出る月や入るゝまて松の影　竹趣
山里ハ罪なき月のなかめかな　蕉雨
何となう秋の面しき夢月　津 披凡
○早行
鳥坂やまた明月のころの嚢　ヒタ 東有
名月や袖にもかゝる草の露　潜竜
初秋まつていふ嬉し初月夜　月底
松かけやつきあひの空晴し　野秀
○
古き寺の鐘鳥を追ふて日くれかな
名も志らぬ山井も今宵て秋の月　友鳳

○嵐の席て空ハいやしき名月とも
世をこのもしき住居なりけり去年の秋
家もなのかしくて
草の戸や家を過たる月まかせ　而后
月の夜の鐘ハ何処やらて寒哉　艸人
あなたなる丈さん月のちらくらふ　浮 成美
○琵琶橋にて三人の乞食ばかり一椀の酒に
酔していひけるハ花のよし鶯遠し何ハ
そのいひけるハ雪のよし出ハ出むかひそのて
いひけるハ月のよしさ出ハ今宵八十五夜
なり月と見ん　汝ら眼力なき何つハ遠しなれ

とてその酒をさしむけゝれハさすかに餓も
こゝさそ嬉しかりにまとぬしける

名月やうときひらも見ぬ佛達　栗大

〇碧亭小集

墨筆の画のよりかゝふの月　桂五

〇ある片田舎に住る男大釜ひとつ持て
是をふたつなき物に見えぬ歟らくおそれ
夜ハ釜の中に入ゐて床にかゝるにある夜盗人
入来り主人釜をと盗出してかきて持てゆくに
男ハうまく寐入て夢にも是を知らすにや
ゆりぬれハ釜ありまに寒きにかまき八盗人也
持かへみて此井に捨てけりかくとてかの男
目さめ蓋押揚て見出しけるにおの
夜ハ八月十四夜にてありけるにさやけき月まことに
清かりて萩もすゝきも露おもやうによそふ
すこふりかゝるハ男いきておもひてハいるに
あまりに釜をとられて家をハ捨すし
しくなりてと挑く

やゝくるゝ月に抱いふひとりか　卓尭

雨夜山をとものなみとりて月一夜　鴫立沢 葛三

人も来てきくんとてや山の月　大坂 三津人

出る身の太きくなるすゝき哉　長サキ 祥禾

十六夜の樹松を出放ちり　大坂 尺芥

はつ戸の来る日なりけり月は西　信 素檗

としくれんし秋の月は同し月　い 雲帯

けふの月さてもそしらぬ花かな　江戸 芝巷

月はつきすそ雁のなかなり　奥ノ 乙二

百年も流て見れそけふの月　大阜

月ひとつ折て寂なしの柱ひの　ミラ 竜渕

名月の生れさあをよ海の上　星川

海山も同しかけの月　湖凧

松よりへは影の苦よみる月夜哉　少汝

月は松よ竹は松くの嵐をたとひゐる

一つもの丁を鳥雲の追へるさま眼たゝき
もなき風情なり畠その／そよぎにも
まれいやしの秋やなかゝる垣の秋
面より小庭を眺しもをりしあれと
むかしり言よかさぬし月をと見送りけて
鳥の月星は葉山ふをと見むれ　棋棠

跋

玉兎抜合しをへるをりから昆仲騒士
の様々よませられける月もふくと汁の
寂々さびたる月なども ことの外にはえ/\たるを
なを月のまつりの桃栽哉　ミノ 桃源
南無や元(?)そらを編の月夜哉　サツマ 琴洲
よろしみに山行るころ雲の月　ミノ 左琴
究竟の月出るやうめの花　クハナ 文角
なを明月やテラ(?)一円まつんくに　大坂 万和
今宵は月来しやり梢尾哉　長崎 菊也
月の漏るやうな屋根ふけ節哉　京 李甚堂

門をさして出る八月の枯野かな　洛 茂良
縁けや此来枯野の月かゝ 浅　、蒼虬
すゞしさの月をとちる柳哉 似たり　大坂 春思
行く方月は向ひぬ雲の月　ミノ 世竹
風薫る小松の月来か　、里栄
ひや/\と月もさはや芭の気(?)　丹波 武陵
七種八ッ日も忘れし月来かな　ミノ 曰入
すくなぬもよりの月の秋桜哉　大坂 長斎
雲の来の月や行とも峰の雪　江戸 巣兆
三日月も見ハ枯るゝ柳　ミノ 椎渕
雪くは伊吹ハ見し雪の月　イセ 李東

月影や梅のはしある松の山　河内 来紀
日の影を引よせて並ぶ火桶かな　大坂 井眉
瘦藪子日ハとらまへて清水鷺　京 似李
風のまゝうごく寒く春の月　二十三 喜年
三日月の梅の花より細めやし　兵庫 桐栖
むかしのうちに志をとりし高子草紙の末二
書終りぬ
對鷗亭梅叢

柴折戸集序
大和うたハからうたも心も猶ハ志める
ハ出ひもつあらハはらハ蕉翁の筆
に猶ハんと見ぬ世の人を志のそれ
志らぬ松島のほしくきにほそ道

昔ハ柴の花羅波の苔の下露よ
なをしあめて雪積る峯の嵩まて
風雅の心うちよらこときこ云葉おこ
ひらく筆をとりふしとみき抽ハ伊勢の
清き流をこそ經なる杜にて朝をなりけり　岳輅

馬街園杜影發句

秋

打髪しわとなつりや芭蕉
杉風の止ときつれ霧尾花ぶ
同し掛まとまり乗へ糸り携蝶
杖風の吾ま影の旭りか
中へくまちいさき掛よりて初嵐
ゐふえぬり人まる緑生月夜ハ
雑りほをとめ堂ハみようそつ秋露
雑りれめ咲ハ蝶ともちを佛しぶ

夏秋の虫も見えなりけり枕の霜
枕の露をこぼさずにとの月影
むしろ戸や鴫の山松明鳴の露
鹿鳴つるの聲く麓かな

冬

日本月影をもみぢたる木葉かな
木からしの手より出たり竜田川
木からし乃中にも浮ふる笛かな
雪明の下に四五本冬木立
うつしけしときに紅小松の芒かな
松は根に枯れてきたるをもかな

大雪を谷木戸鳴る戸にかな
沐しき蟻の気打てり

百御園

旅人の蓑もなくて冬の旅
大雪とけて雪をも松の根の

夏

宵月に二夜二京多さて時鳥
垣根ひとつ母子乃なし花卯木
夜山にかかる色なり京の所
竹の子や人は吼つく里の花
夏の夜ハ宵から白き東かな

途中

若竹の雨ハ止なり鴫の声
寂しさハ鳴とおもへようん去香
辛添の雲より古し一囲枝飄
山里ハ霞よおもし幟かな

神諸山

若葉雨の中も色ハ鉛日ふ
竹植る日とく提り小笹ふ
あつき日や笹葉ふさしなる牛の尻

雲

家ハ雲か杏る己ゐつかきり

初雪や雨の降さへ恋けしき
春はりぬるしやうあり雲の雪
香の有る枝かゝ春ハ咲まなり
おとしから黄香の鳴小庭ふ

鉢廉山

蛍の声か松風か川の音か
春の日の桜とゝけく入山色ふ
花るゝ雨ひゑ嬉しく思ふ御か分
紅梅やなをまつさへ咲かぬる

旅中

大津ホて眼よつき初し乙鳥ふ

雲霧の中にも落る笠かな
嵐山
としくや菜にすれ雪松の枝
ひつはらく菴の戸ぬらず蛙が
ちる花にいとちつまぬ蝶の音
宗中
草庵や寒気多き新雲の墨

四季混雑

うつくしう付く菴の火桶かな　松雀
若菜やちら付て暮る牛の尻　石郷
月影のとゞくや墓の落水　雪碁

志らぬ絲は探りきぬる枕　塩叟
雲の日のはれしくさきや其土筆　霞舟
はくしく花ちらぬ日は霞き山家かな　竹奥
鶯啼やひよりたる梢　其仙
花見するや雀のかしらかくし　寸明
神風の伊勢に生まて萩の声　探香
渐ほとの華もなくて鳴蛙　宗古
象をなや田の麦の寸斗　文佛
色々ぬ松らしう松の月哉　翔秋
ひとりみや焼くとも秋の暮　巴陵
菊ひきの附る首て出る一里塚　十精

見くる日やけしくうまよ喜む枯の風　杜彰 老母

ゆふ西やとの友まくらしう啼ヶ鳴　東女

三日月やつゐこうちなる梅の花　九十

菊なすこと柳ハ霜に枯よかり　菊弥

ゆふ日の梢も差て星の糸　集蛾

茶居

杉菜戸や霧朝臼の子されつる　呂兆

ゆふ月に桔梗をひとり戻りり　巣居

霜月やへハしくされ扇残る　朴堂

扇とハ別る時の名なるへし　桂五

高座山ハ風乃袋と嫦娥　茂東

十六夜の雪間のよそて月夜影　友風

月かんとて猿氷をるさへいとうき　椿堂

初霜やまのにぬれたる伊吹山　省我

白雲を隠さけてめぬ飛と汲　帆阜

忘らさる恋よかくし杜鵑　九岳

湖の水にまつりしさきぬさし　田江

秋風や掃ちきりゆる寺の門　午凡

肩の木ゟ岩とんでしまふ曲くさし　求巳

岩の上まへるをたり丁の湾　梅洲

東福寺にて

色ごとに竹の法楷かくなりけり　千阿

秋風やちるさくうえぬ山の奥　大蘇

かしこくも菴の南也居や菴　竹趣

木ゟしゝや宗へ押よせやまの秋　元義

ひきしめや西に吹ゆたる虫の声　淇石

落ちりり日は一本も山のうへ　虎更

萩の露佛は何も笑かし　硯静

掃捨し草の花さへ立にけり　かつ

秋ながら月のとの乱り草の上　梁臺

手借ホり圓く穴堀清水かな　暁浦

時雨ても妹は行すや萩の露　卓池

良夜

雨の月おもしてされは人も寐し　作吾

あの実とて人は尽しすや露時雨　葛非

雲おやしもて兎の噂も室の日や　野秀

田を花の植て行しれて噂し蛙　岷屋

見上頃や鴉は秋のかんなる魚　黄山

湖の出ちらそれ時ゝ蛙の分　野秀

鹿鳴や礒をうつや浮の月　素月
正月のいくつもおしき梅の花　芳水
かきつばたは汐さし濱の蝶　樵雀
菜の花の匂ひに光る小雨かな　湖風
煤掃の後も静かに木の間かな　卓老
角より一羽ふく松の上も松の声　帯梅
黄鳥や日の昇るにまかす梅　五堂
鶯の声さらによし苔の露　沙路
山里はいとゞ蟻に涅槃縁　大阜
大かたは月さへ見え見ず秋
ゆくとしは人の老ともなるもの

昨日けふの雨しよりて雨に月も眠る　六砦
雛の子は所に花ひもとる梅の花　永砂
元旦は夏はさめなり小夜礒　竹堂
堂をまもる松や小春の名のこゑ　吐山
眼よりつくは鳥羽の竹気のこゑ　金谷
七草八草芝草芝草淀の町　駕凡
こしらへもまふしの中も苔の風　䑑来
白牡丹二日かつてはなりけり　松草
筧なくる墨や揉子に頭もて　河蝶
株とまるけ今年噂の霰かな　雲川
蕎麦の家は蟲根かしや袖へ工夫の神　五雄

月にさき秋にやよむしろ時雨　李東

うけとゆる氷やすくみん梅の花　周瑞

舟ゆくも脂をうきたり岸の花　秋挙

姿をしのふ京なれは枯尾花　梅間

蝶飛や朝く晴る庵の前　麻野

庵の戸ハ河原にあるを春の雨　雁鳴

暮ても晴ても梅に月の雪　構良

新涼き松に峰あり秋の雨　青川

枕しても鳴子の音や夜ぬる　方明

家ありて垣も亦つ丘の松　栗大

今ゆるやうに鳴たり桜の下　圃暁

花の声のまつ鳥つまさぬ雲の前　挑林

五月雨に森くなる音の秋ならで　其白

立むかふ松をのみそ壮の雪　李臺

旅人の足をとしたかし夕雀　丘高

春別やとくさもしとれるの雨　左涯

紅しの吹き絞さり角田川　雁人

端竹をもすきたふ月の花すゝき　可竹

名月や身ちなき世せす月の影　奥毛

茫々も帰や香の年の雪　推巴

常ゆく長をする

胡麻の髭につゝする桜かな　試呂

秋の空の薮ゟ日の入さかりに　雪封
三日月ハ月の耳なり啼蛙　月岱
伊勢まてやとりしの来也　對我
月芒を稲の背子か吟えなり　梅素
咲花ハ米盛りの冬の旅　魯虹
洞の森これハ乞食の寐所に　祺六
月さへてよく沸し枯尾花　昆明
蟲蝶にせてらゆるく眠らせて
咲そむる綾採揺ハ方さまさまに
かゝるしハあるし咲えて

茨道を旅しも花なかりし湖の秋　士朗
松の花も光ゟ宮の両柱かな　大啇
途中
昼西ハ夜篁山さし志合迄なり　呂兆
昼西や子修の待く松の下　岳輅
胡鳥の花ハ咲ても月影に　杜影
秋の勝の春を告るしるし　呂兆
鐘鋳ゆ子の舟を踏也　令　士朗

人のきらんのうつる山畑　五雄
新つめ八身うらりしとらあくし　岳洛
兎ヶ谷迄て中ふ志く[illegible]ふる　秋挙
大寺の葱の肥る[illegible]　兆
加个しもとけぬ[illegible]ふ泣出し　朗
[illegible]ふ瘡[illegible]　雄
灯影のゆらく[illegible]のうるく　洛
糟屋の一雫[illegible]を勝[illegible]　挙
をにの人と[illegible]　兆
太黒八[illegible]盗[illegible]　朗
松木の中[illegible]　雄

柏くらぬ猿の[illegible]女の衣さま　洛
見る簾の錦の[illegible]　皿を買　朗
[illegible]の月のまつりも[illegible]れ八　兆
[illegible]　挙
[illegible]　椿堂
[illegible]　洛
人く八松の木のうるに眼を張て　挙
わうう柏の勝りそへけり　兆
椿札の古さ　五百年　[illegible]　雄
四月八日　[illegible]　堂
弄の花を[illegible]の[illegible]眺やり　洛

素足のあと綫揺けしてけり　柔
姫宮の社の檐ハふるゝまて　朗
笹葺のぬきさし中入日の出る　雄
夕月を承る冥枝に乗くらり　柔
酒は一年の筆ぶれるハや　洛
梅待に髭蟬のちえたちて　兆
流の畠をものしる　閑ある　朗
十月やしに衣唄の悲しうらく　堂
ふつくりと手をきらぬ萩の芽　兆
恙なり篤志の其天の夜の話　格
春る風ひてしるに霞あたゝまむ　柔

柴戸跋

杜翁の遺稿を柴の戸と
いふ紅塵市上の住居
なからも芦荻の深寂に世
をすてぬる亡人のこゝろあり

へし甚孝兔十夜人呂兆よ
はりまそあさきさくら
燕子をるてゝ友人の信
松の参て孝子の事證る

士朗

夕紫亭歌仙

沢山な月日の出て梅の華　士朗
のけ葉雪ののとかやかり　翁我
残らさきさの海苔らと子ま夜　仲丞
小萩のやとくろる人く　月底
いさよひのやとそとそ時雨鐘　沙鴎
皓の菊鉄盃町かふく　士朗
足をとへ波も鴎もうまそそ　對我
まろの小さ紙寒ちか妻　仲丞
袖のうゝ子業咲て捨る瓜の皮　月底

升の宗は好まる　乞盤　沙鴎
伊勢人らしのよるのもうつくしく　士朗
獅子を舞ハひく中垂ゝする　葛家
出けふの日のきくひハ空くりたり　升丕
砂のひやつく霄くのそうら　呆庵
庵てりこよ月翠の下の佛達　沙鴎
是ま色の木古れハ櫻木　士朗
吸さのハ出ん色魚す前まく　葛家
毛のいひあかふ丞月の號　升丕
川ゐのその伴ふも人のふつかしく　呆庵
炬の火は焦す前　うれ　沙鴎

とやくと交の帰を荷ひきて　士朗
掲もさし拵ぬ掛子の　おほ　葛家
一里は連歌師二人そうちたり　升丕
奥浄瑠璃のそゝろ出ける　呆庵
さかうし彷宗の鳥居の赤くと　沙鴎
納豆うりぬ家とく八分し　士朗
居風呂の中でも月ハ拝まるゝ　葛家
拵さいハ泣きを人のなかり　升丕
笠みきゝる芒の露をうちりて　呆庵
さそりし跡もさうふ海士の戸　沙鴎
胡酒の楼燈をとひはあるくし　士朗

辛崎波め小町のとゐ似を步　鶯我
松一木星もつまよきいらの宮哉　竹有
霞のくしぬ花の葉の山　月底
揚雲雀大名の乗のちらつきて　沙鴎
もらふハをとし抱てつまそて等々　士朗

八句　士朗
七句　鶯我
七句　竹有
七句　月底
七句　沙鴎

二　士朗
春の日暮しの庵菜蒔衛ぬ
艸雛の折ほとく山吹の扇　竹有
おりとめる本との雪を桃桜　岳輅
手の平ほとのお茶をまゐる　兼野
腹ら猫の黄をもりて初朗　鶯我
あとしハ栗の隣いた橋　不措
裄の膝のめたく黒らくう　月底
宇治のうすら来てハ揚らふ　梅岡
庭ことぞハ菊らふとゐ奇り　竹有

傘袋廣げて手をさしたし　岳輅
雛段よ乃ものやうらうき人を　康野
二十日の月の山際乃雲　篁我
松杉のくもつの奥から出る鞍すゝき　不揣
何のむらかある我とまて殺　沙鴎
甚よりけぬくらふの気紛もうの具　士朗
気つさとふえる軒の雀子　月左
笠丸の苔ハ朱よくりり　梅間
蔵揚への蔵めの蔵られ　升亥
おとうけふりまて見る東山　篁家
禿り姿の取とえる晩しき　康裡

揺や乃戸小畝の苑嫁を唱ふて　沙鴎
一ふきふ筋夕影の花　不揣
時を事をすゝ潜れハさ辿ハとそ　月庭
足一ふつ落てし驚り翼する　士朗
西風ふて裾ハ馬も借ヲ本に　升亥
十日帰よ升さる立めり　岳輅
足挿のうたまつてり月の躬　康裡
むとし米うく高京の法くて　篁家
甲子を奉みれし唯し篇　不揣
沙花の家ハ纏ふたしる我を　沙鴎
如くく世のれりて草もる鷹　士朗

水のみる杏を噂の炯うち　月底
てらされしものゝ上にも百千鳥　岳将
人に置れて仕舞ふ蝶餅　非香
松を絡しき畑の畦から仁王門　蔦我
箱の中へ語るみにかり　梅間

四句　士朗　三　梅間
五句　非香　四句　岳将
四句　素桂　四句　蔦家
四句　素鴉　四句　月底
三句　沙鴎

三

さゝ波立衣着綿て出てかなた　士朗
柿に縫の結ふるうつゝ火　沙鴎
我やとの芽に告る栗を土に植て　桂五
人に試のぬつ布を名のすゝきる　非香
一しられたる堂一つなれと崎の雀　蔦我
笠袖引て歩行蛸の干　月底
沙々なるし物もわるき縁の下　沙鴎
猫のくさ花に消ると火　士朗

いくつ事を問る人さびし秋の風　竹有
露の情へ夜二夜游子すく　桂五
鶏はさらに出立つ草の露　月底
ひるも月傾る淀の川　萬家
出代へ仏のうまるゝ秋さへ　士郎
旅の病のわれく淋しき　沙路
為事は影おとしけり夕の月　桂五
御ヽ度のへとくも神主の酒出せ　竹有
うちわまかせてむ竹の縫ひて　萬家
煤まちかねる一つまし弾　月底
ちらくと雪をかゝやかす米の上　沙路

塩をくつゝく弾ら以て来るも　士朗
新法師の宿に手燭を探むる　竹有
夜ひえりかゝる障子たすねる　桂五
うさ鳥の嵐に呼ちかへり出し　月底
墓のまはる居風呂の中し　萬家
昔らるのさをいつも添名とりて　士郎
わりしとさうき萩の月　沙路
亀の手は秋の夜をとなへてやり　桂五
聞し雨はさうらね草かり　竹有
入口の昔枇杷さき観音る　萬家
誹諧ふたる沙法わや出世せし　月底

士山の夕立雲の裾きれて　沙鴎
二声鳥を帰すにおひも無く　士朗
借馬に為したる人を浮えし　竹舟
霞の底にうつる若葉　桂五
さましの花のかけより桃の花　月底
自慢に入れるたるの塩網　對我

六句　士朗　六句　沙鴎
六句　桂五　六句　竹舟
六句　對我　六句　月底

四

櫓の音ひゞくなる山路の　士朗
岸にうつりし水鶏の下　月底
うくひすハ月の巣守ると啼やらん　沙鴎
とまれ花ともしらぬ鳥　玉水
旅人はあちこしろけふ箪　對我
形の松葉のそよくしたる　士朗
朝の月の小窓に光の星くえて　月底
あとも名のあるるの横のり　沙鴎

赤ふその内に喰めくハ死もせす　玉水
椿のおちりよ慈り出もはく　萬象
朱色の鼻ふ漬いたるさゝめごと　士朗
秋ともなくて松ふ世の義寺　月底
草の葉のひらひらと年の秋　沙鷗
行よするゆふ草の雲をとる　玉水
盗人の宮寺めく栄の唐　萬象
冷樽の赤りのぬけるぬ月　本朗
潮のとりりしたる夕柳　月底
蝶のあるゝハ背の方へたゝ　沙鷗
喰ともの先つきすゑくり縁の上　玉水

おけて木ふらし香摩耶の高根や　萬我
麦の穂手をつかんで辛ゝ別並ぶよ　士朗
魚の油をとまるつれなさく　月底
ある蔵のあかりたる薦の下　沙鷗
黄つる馴染のすきし畜引　玉水
笠ならさき倍て来る人ふし流れ　萬象
表子達餅の一枚もなし　士朗
湯よいそして舟の中ふら嗅るや　月底
小利をあつめ沢なりくの月　沙鷗
この身ひらの気分手枝をおりくそ　玉水
そのをとりけらく薦る桐の葉か　萬象

虹の根の小笠の露と成にけり　士朗
かし人形に月をあけてやる　月底
あをしろをうしげ菊花翁賣　沙鴎
まだとしめる念川の美　国水
神妙に花の咲たる鈴かな　篤斎
板の宿にとまりし燕の來る　士朗

七句　士朗　七句　月底
七句　沙鴎　七句　国水
七句　篤斎

名

蓑の毛も長くも多くと思ふかな　士朗
座敷わらふ扇桔の宿　米彦
一羽り狩の背中へ作出て　大阜
ひそかくもふ稀をさすやし　鶯我
わらし噺宣の扉を開放し　沙鴎
数をかぞへ松風の宿　月底
平免もあたへてあけ河豚汁　笨彦
繹とかりて銭かりにゆく　士朗

おとしおう喰つく人のうしろつき　萬象
野分を流る加茂川の水　大阜
四の緒の撥ま百足を捨よ出く　月底
涙ふる海をさる妻田秋の月　沙鴎
おくやまのつゆの家よりも八重葎　士朗
鶏啼やしきやのきぬたうつなり　米彦
ひふるきをおりすすめも八雲起　大阜
深草の宙出で宮にたる緋　對哉
わかどもありき人の噂も花よ香　沙鴎
寐おしと咲せよ山吹のもと　月底
岩津とふ水もここの春らん　米彦

雑の作以為ちる小田米を無　士朗
君慈四の伊吹おろしよ浪上る　萬象
旅のり門るり枝を挿と出す　大阜
鞍一のとの髪を嫁ゆき　月底
信蛙とちる蘆稲の青も料　沙鴎
すゑくと岸の松隠すをかり　士朗
樗ふみ統史料々津の　米彦
世の中のためをいそぎりくす　大阜
なふも返さぬ出ちの氷白　對象
ふくる親の牙延系も女月の　沙鴎
菖蒲揺かくさと帰一つよする　月底

ねうねう風とはまけゝ橋なくて　米彦
紫橋に霧まひの峯らさき　朮朗
志らやきの辰巳が方は山もなく　對我
扇の峯も時雨かゝりけり　大阜
蝶ゑとの都ミ手ハ花なりけり　月底
霞かふつゞやかゝるゝくく　沙鴎

六句　朮朗
六句　米彦
六句　大阜
六句　對我

六句　沙鴎
六句　月底

文化九年壬申歳実り

巣秀
沙鴎　同輯
月底

古朗便ゞの文を梅花園傳て
つくしへ仰きゝ
こえゝらいの案とゞこてこれを
申のめ句にまかれにまゐる
とうしゃみるれ上へ傳ゆゝる
桂れのせくやめく

長

生れたるあはれし乃
いくせんとせし昔も
折まさ形状のみえと
生まれそさくり帰られなと
申よさねしくさし
奉るる血ぬれ行の

びしらさくさ舞かくつてく
聞し給ふを人々聴ぬ
在らせらく蛇にまとう
申る頭の茶しさまを
乙酉秋
来園 延雅

文政八年乙酉秋發行

梅花園藏板

3/35

大日本國郡全圖

東谿翁著 大本 彩色摺 箱入 二冊

此全圖ハ地方を詳尓志るし名所古跡神社佛閣と記るゆへ必用の事ゆへく此頃の新年乃工夫をこらして絵ニ精よちりばむ其各國の郡縣村落山川ホ著色をわけて一覧す易し先乾坤をしる事眼下に歴然としく彼仙家縮地乃術ニ登乃乞や戸を出ずして天下をしるといへる古語も當くいまけ為にいふなるべし

書肆 尾張名古屋本町七丁目 永樂屋東四郎